

# 小学校養護実習におけるウエルカムボード(掲示物)作成の 効果と課題

斉藤 ふくみ\*・古池 雄治\*・堀江 直子\*\*・鈴木 彩羅\*\*\*・松田 芽生\*\*\*

(2018年10月24日受理)

Effects and Challenges of Creating a Welcome Board (Bulletin Board) for Elementary School Yogo Teacher's  
Practical Training

Fukumi SAITO, Yuji KOIKE, Naoko HORIE, Sara SUZUKI and Mei MATSUDA

キーワード:ウエルカムボード, 養護実習, 男女差

本研究は、小学校養護実習において実習生の作成したウエルカムボード(掲示物)が、児童にどのようなインパクトを与えたのかを明らかにすることを目的として、小学3～6年生計142名を対象に実習終了後質問紙調査を実施した。その結果、「ウエルカムボードを知っていますか」「ウエルカムボードの内容を覚えていますか」等の質問7項目全てにおいて、肯定的回答の比率は男子より女子が有意に高かった。教育現場での掲示物の作成には性差を考慮する必要性が示唆され、男子の興味や思考を促す教材開発を今後検討すべきことが捉えられた。

## はじめに

改訂(平成29年度告示)小学校学習指導要領第1章総則2の(3)では、「学校における体育・健康に関する指導を、児童の発達の段階を考慮して、学校の教育活動全体を通じて適切に行うことにより、健康で安全な生活と豊かなスポーツライフの実現を目指した教育の充実に努めること」<sup>1)</sup>とされ、さらに日常生活において適切な体育・健康に関する活動の実践を促すよう配慮することとされている。学校で行われる健康教育は、保健教育、安全教育、学校給食・食育、体力づくりなどを含むものであり<sup>2)</sup>、養護教諭が作成する掲示物は健康教育の一つである。

掲示は、保健だよりと同様に、学校保健目標を達成するための一つの手段であり、学校保健における啓発活動<sup>3)</sup>として、学校においては校種を問わず実践されており、養護実習においても実習

---

\*茨城大学教育学部

\*\*水戸市立飯富小学校

\*\*\*茨城大学教育学部養護教諭養成課程

生に課せられる養護活動内容<sup>4)</sup>である。

掲示物には、斉藤<sup>5)</sup>により、保健指導型、実験型、広報・伝達型、参加型等に分類されており、様々な形態がみられる。学校においては、紙面を壁面に掲示する形態が一般的に行われる<sup>6) 7)</sup>なかで、ウエルカムボードは比較的新しい試みである。

そこで本研究は、小学校養護実習において実習生2名が作成したウエルカムボードが実習校の児童にどのようなインパクトを与えたのかを明らかにすることを目的として、質問紙調査を行った。養護教諭が行う子どもの健康に関する意識の向上や知識理解、思考を促す働きかけとしてのウエルカムボードの有効性を検証した。

### 対象および方法

平成 29 年度前期養護実習(3 年次必修科目「養護教育実地研究 I」);実習期間 2017 年 6 月 5 日～6 月 16 日)の実習校のうち、水戸市内A小学校の児童 3 年生から 6 年生の計 142 名(調査日の出席者)を対象とした(表1)。有効回答者数は 142 名(有効回答率 100.0%)であった。調査期間は、2017 年 7 月 14 日～26 日である。方法は、質問紙集合調査とし、各学級で担任が児童に説明しながら実施・回収した。質問紙の内容は、「実習生を覚えていますか」「実習生がウエルカムボードを作ったのを知っていますか」「ウエルカムボードを読みましたか」「ウエルカムボードは楽しみでしたか」「ウエルカムボードの内容を覚えていますか」「ウエルカムボードは役に立ちましたか」「ウエルカムボードについて、お家の人に話しましたか」の 7 項目であった。統計解析は、学年間と男女間において  $\chi^2$  検定を行った。

なお、ウエルカムボード(縦 90cm、横 60cm)は、黒板様式であり、設置場所は、児童が利用する昇降口を上がって、階段右側の空きスペースである(図1)。掲示する内容は、実習生が独自に考案したもので、日替わりで作成し、季節を考慮した水泳授業や、歯科衛生、虫刺症など保健に関する知識と情報の提供が主であった(図2)。

表 1 対象者(児童) 人(%)

	男子	女子	計
3 年	21	24	45
4 年	17	12	29
5 年	15	21	36
6 年	16	16	32
計	69(48.6)	73(51.4)	142(100.0)

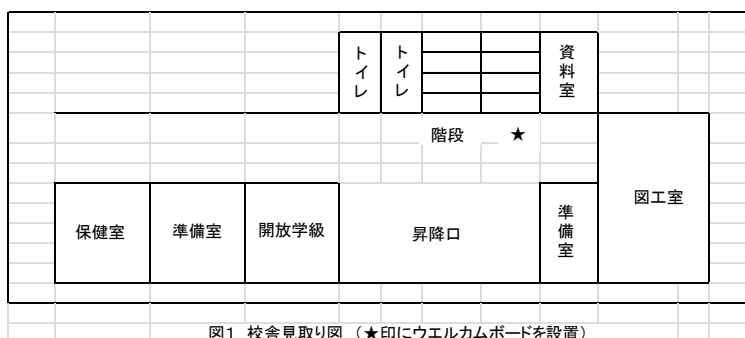


図1 校舎見取り図(★印にウエルカムボードを設置)

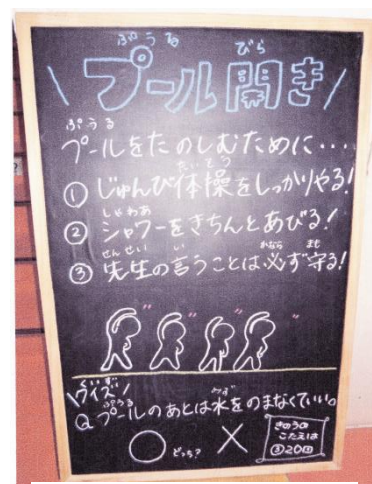


図2 ウエルカムボード一例

倫理的配慮として、事前に学校長と養護教諭に本研究の目的・方法・内容等について文書と口頭で説明するとともに、調査校および対象者のプライバシーの保護を厳守すること、データの管理方法および研究終了後のデータ廃棄について説明し、調査の了承を得た。対象とした児童には、担任が同様に口頭で説明し、調査の了承を得た。

## 結果

### 1. 実習生の認知

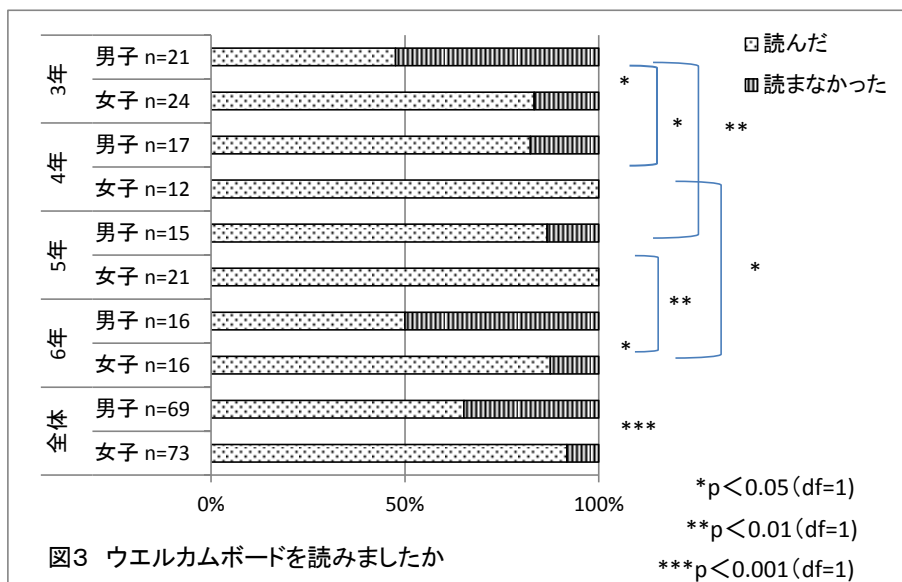
児童が2名の実習生を覚えているかについては、学年比較では、4年生で覚えているが96.6%と最も高かった。男女比較では、全学年で女子の方が覚えている割合が高く、全体で有意差が認められた( $p < 0.05$ )。

### 2. 実習生が作成したウエルカムボードの認知

実習期間中に実習生がウエルカムボードを作成したことを知っている児童は、学年比較では、最も低いのは3年生77.8%、最も高いのは5年生91.7%であった。男女比較では、全学年とも女子の方が高く、全体では有意差が認められた( $p < 0.01$ )。

### 3. ウエルカムボードを読んだか(図3)

ウエルカムボードを読んだ児童は学年比較では、5年生が94.4%で最も高く、有意差が認められたのは3年生<4年生( $p < 0.05$ )、6年生<5年生( $p < 0.01$ )、3年生<5年生( $p < 0.01$ )、6年生<4年生( $p < 0.05$ )であった。全体では、読んだ児童は、112人(78.9%)であった。男女比較では、全学年ともに女子の方が高く、有意差が認められたのは3年生( $p < 0.05$ )、6年生( $p < 0.05$ )、全体( $p < 0.01$ )であった。



### 4. ウエルカムボードは楽しみだったか(図4)

ウエルカムボードが楽しみだった児童は、学年比較で最も低いのは4年生46.9%、最も高いのは5年生69.4%、全体では59.2%であった。男女比較では、3年生( $p < 0.001$ )と全体( $p < 0.001$ )で有意差が認められた。

5. ウェルカムボードの内容の認知(図5)

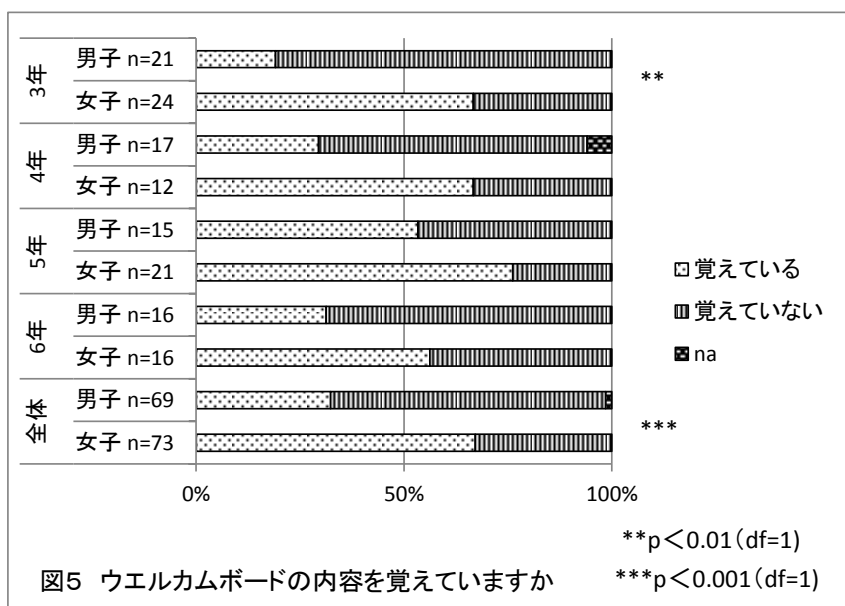
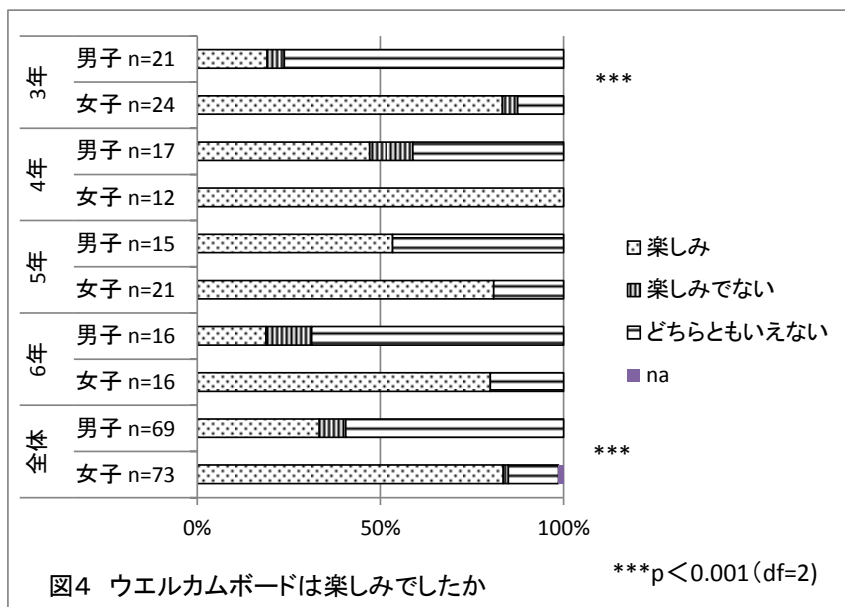
ウェルカムボードの内容を覚えている割合は、学年比較で5年生が最も高く66.7%、全体では50.0%であった。男女比較では、3年生( $p < 0.01$ )、全体で有意差が認められた( $p < 0.001$ )。

6. ウェルカムボードの有用性(図6)

ウェルカムボードは役に立ったかの質問では、役に立ったと回答した割合は、学年比較では5年生が86.1%と最も高く、3年生との間で有意差が認められた( $p < 0.01$ )。男女比較では、全学年で女子の方が割合が高く、全体で有意差が認められた( $p < 0.001$ )。

7. ウェルカムボードの内容で覚えているもの

ウェルカムボードで覚えている内容を表2に示した。男子では、「まちがいがし・クイズ」「カミナリ」が50.0%と最も高く、ついで「歯・歯肉炎・歯みがき」が27.3%であった。女子では、「体のこと」が44.9%と最も高く、次いで「まちがいがし・クイズ」「実習生の紹介・お別れの言葉」が共に30.6%であった。



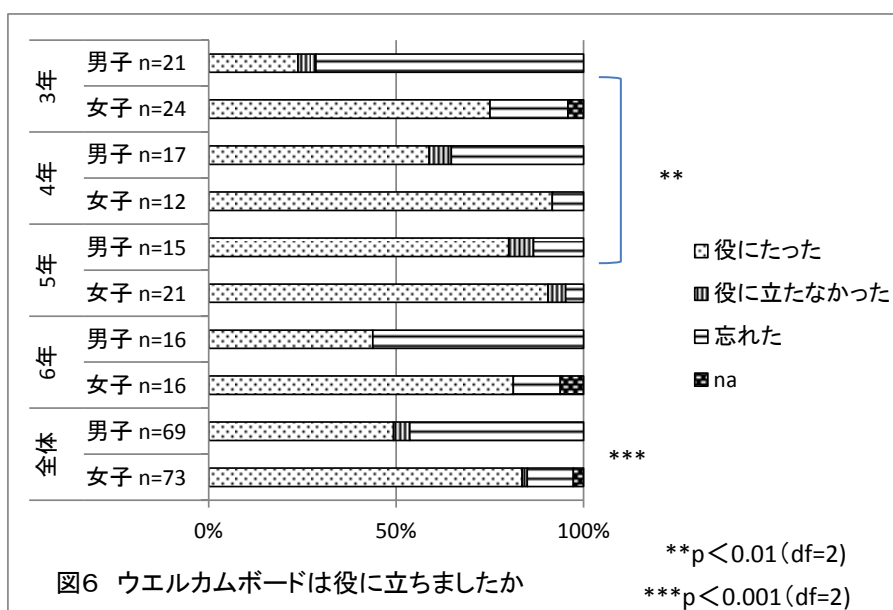


表2 ウエルカムボードで覚えていること (複数回答)

人 (%)

	中学年 (3・4年) n=33		高学年 (5・6年) n=38		全体		
	男子 n=9	女子 n=24	男子 n=13	女子 n=25	男子 n=22 (100.0)	女子 n=49 (100.0)	計 n=71 (100.0)
体のこと (一番硬いもの・汗・耳・目・体温・虫刺され・土踏まず・あくび)	2	9	7	13	9 (40.9)	22 (44.9)	31 (43.7)
まちがいさがし・クイズ	1	7	10	8	11 (50.0)	15 (30.6)	26 (36.6)
カミナリ	6	10	5	2	11 (50.0)	12 (24.5)	23 (32.4)
歯・歯肉炎・歯みがき	2	4	4	8	6 (27.3)	12 (24.5)	18 (25.4)
熱中症	1	0	4	2	5 (22.7)	2 (4.1)	7 (9.9)
プール	1	1	4	4	5 (22.7)	5 (10.2)	10 (14.1)
実習生の紹介・お別れの言葉	0	5	1	10	1 (2.0)	15 (30.6)	16 (22.5)
夏休み	0	1	0	4	0	5 (10.2)	5 (7.0)

### 8. ウエルカムボードをお家の人に話したか。

ウエルカムボードをお家の人に話した割合は、学年比較では、6年生が25.0%と最も高いものの、各学年とも20%台であり、全体で23.2%であった。男女比較では、6年生女子が43.8%と最も高かった。また、全体で有意差が認められた(p<0.01)。

## 考察

### 1. ウエルカムボードの形態・設置場所の効果

養護教諭が作成する掲示物は、保健室内、保健室前の廊下の壁が一般的である中で、本研究において実習生が作成したウエルカムボードの形態は、黒板形式となっていて、日替わりで作成したため毎日消して書く変化がみられるものである。掲示物は、一週間から1ヶ月と比較的長期間掲示される特性を持

つなかで、全児童の約8割が「読んだ」、約6割が「楽しみにしていた」との結果から、日替わりで変わる内容は、児童に「オヤッ」「アレッ」とおもしろさ(興味)を感じさせる<sup>8)</sup>効果があったと推測する。

またウエルカムボードは、全児童が登下校時利用する昇降口近くの階段右側にある空間の児童の目に触れやすい場所に設置された。船田<sup>9)</sup>が生徒がよく通る階段のいつも目にする全面(デッドスペース)に掲示することで、記憶の定着を図り、教育活動の理解を助けるアイテムとなると指摘するように、学校の中の空間を検証して、子どもの動線や視線を考慮してウエルカムボードなどを掲示することが重要である。

## 2. ウエルカムボードの内容の有効性と男女差

本研究において質問紙調査の結果を男女別に検討したところ、児童全体を対象とした場合に全ての回答で性差を認めた。学童期においては、男子は積極性に、女子は生活習慣、責任感、公共心に優れ、教科では男子が社会、理科に、女子が国語、音楽、社会においてそれぞれ異性より優れている<sup>10)</sup>。今回掲示したウエルカムボードは、歯、汗、目、虫刺されなど保健に関する知識と情報の提供であった。ウエルカムボードを読み、楽しみにし、内容を覚えて、役に立った、との回答は女子で有意に多かった。これは、女子において男子より生活習慣や公共心への関心があることを示していると考えられる。さらに、女性は非言語コミュニケーションを理解することが優れており、男性に比べて多くの対象に視線を向けることが明らかにされている<sup>11)</sup>。このことから、ウエルカムボードの存在とその内容(とりわけ「実習生の紹介・お別れの言葉」)は、女兒がより多くの興味を向けることになったと考えられる。このことは、お家の人にウエルカムボードの話をしたことが女子に多かったことからうかがえる。一方、男子は、カミナリと熱中症において女子より覚えている比率が高く、男子は、理科に関心が高いこと、また熱中症では、「帽子をかぶること」が女子より記憶に残ったことが示され、性差が捉えられた。

これまで、学校における掲示物などの効果について性差に言及した報告はみられないが、本研究の結果からは、ウエルカムボードは女子においてより教育的効果がある可能性が示唆された。賀屋<sup>12)</sup>は、男子では授業の「楽しさ」が教育目標の達成に重要な項目であり、感情や情動をかき立てるような楽しさを授業に取り入れることでより効果的であろうと報告している。男子により興味をもって読んでもらう掲示物などにするためには、本研究で男子の5割が覚えていた「まちがいさがし・クイズ」など、学習者の意欲的好奇心を誘導するゲームやパズル<sup>13)</sup>などが有効であることから、積極的に取り入れるなど、性差の特性を踏まえて作成することも重要であろう。

なお、学年比において5年生が比較的「はい」の回答割合が高かった。5年生の女子の比率が58.3%と他学年と比較して高いことに加え、実習生の配当学級は2年生と4年生であったことから、実習生配当以外のなんらかの背景要因が影響していることも推測される。

## まとめ

水戸市内A小学校における養護実習中に2名の実習生が作成したウエルカムボードの効果を検討するために、3年生～6年生の児童142名を対象に質問紙調査を実施した結果、以下の3点を得た。

1. 黒板様式のウエルカムボードに日替わりで内容を変えることで、児童の約8割が「読んだ」、約6割が「楽しみにしていた」と回答し、児童の興味を喚起した。また、ウエルカムボードを昇降口に設置した

ことで児童の関心を引いた。

2. 男女比較では、女子が男子よりウエルカムボードに対する反応(ウエルカムボードの認知、内容の認知など)は全ての項目において高く、性差が認められた。
3. 男子は、女子より「まちがいさがし・クイズ」「カミナリ」の内容を覚えており、女子は男子より「体のこと」「実習生の紹介・お別れの言葉」の内容を覚えており、記憶する内容に性差が認められた。

これらの結果より、養護教諭が作成する掲示物は、保健室や保健室周辺の場所に限定せず、学校の環境を検証し、児童の動線、目線を考慮した場所に設置すると効果的であるとともに、男女差を考慮し、男子の興味関心を引き出すような教材開発をすることが望ましい。

最後に、本研究にご協力くださいましたA小学校校長先生、教職員の皆様、児童の皆様に心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 文部科学省.2017.『小学校学習指導要領』.  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afiedfile/2018/09/05/1384661\\_4\\_3\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiedfile/2018/09/05/1384661_4_3_2.pdf)(アクセス. 2018.9.10).
- 2) 日本養護教諭教育学会.2012.『養護教諭の専門領域に関する用語の解説集<第二版>』31.
- 3) 静岡県養護教諭研究会.2014.『養護教諭の活動の実際 第2版』(東山書房)213.
- 4) 茨城大学教育学部教育実習委員会.2018.『教育実習の手引』221.
- 5) 斉藤ふくみ.2012.「養護実習事前指導としての保健室掲示物作成に関する一考察」『茨城大学教育実践研究』31,207-208.
- 6) 渡邊泰子. 2014.「楽しく学ぶ掲示物の作り方 自分の体を知ろう」『心とからだの健康』18(4), 41-43.
- 7) 藤中里美. 2014.「保健指導とアイデア掲示物 くま先生の健康おみくじ」『こころのオアシス』12(3), 14-16.
- 8) 三島利紀・小澤治夫.2004.「Web活用を目的とした保健授業案づくりの実践的研究」『釧路論集-北海道教育大学釧路校研究紀要-』36,41.
- 9) 船田智史.2014.「学校内掲示物についての一考察-デッドスペースの有効活用の一例として-」『日本私学教育研究所紀要』49,73-75.
- 10) 津留 宏・馬殿礼子・中川弘美・広瀬 博・秋葉英則. 1971.『学校教育における性差の問題. 教育心理学年報』 10,71-74.
- 11) 奥野雅子. 2015.「ジェンダー・フリー・コミュニケーションに関する一考察-システム論的視点からの問題解決-」『尚絅学院大学紀要』58,125-134.
- 12) 賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之. 2015.「学校予防教育プログラム「感情の理解と対処の育成」の教育効果-小学校5年生を対象に-」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』29,53-61.
- 13) 坂口早苗. 2007.「小学校における保健科教育法」『川村学園女子大学研究紀要』18(2), 46.